

明治の貧困をめぐる叙述

—歴史的な文脈から読み解く—

加賀谷 真澄

1. はじめに

明治維新後、社会変革や経済の変動、農村における凶作などによって生活の糧を失った人々は、東京や大阪などの大都市に流れ込んだ。下層民が暮らす地域は江戸時代から複数存在していたが、時代が明治に変わっても、新たな住民を吸収し続けた。貧困の空間は年々ふくれあがり、やがて社会の関心を集めるようになった。

明治政府は増え続ける窮民に対し、救貧施設を設置し、救貧法令を設け、日本各地における様々な労働環境の実態調査を行うなどの対応策を取った。しかし、貧民街の存在とそこに暮らす人々の暮らしを世間に広く知らしめる役割を果たしたのは新聞であった。

貧困地域の取材記事は、早くは一八八六年の「東京府下貧民の真況」『朝野新聞』にみられる。この後『名護町貧民窟視察記』（呑天鈴木梅四郎、一八八八年『時事新報』、同年出版）、『貧天地飢寒窟探検記』（桜田文吾、一八九〇年『日本』新聞、一八九三年出版）『最暗黒の東京』（松原岩吾郎、一八九二～九三年『国民新聞』、一八九三年出版）そして『日本之下層社会』（横山源之助、一八九五～九九年『毎日』新聞、一八九九年出版）と数年ごとに発表されていく。これらは、貧民街を継続的に取材したものであり、そのほとんどが、のちに書籍として刊行されている。

これらの記事は、東京か大阪の貧民街、あるいは両方を取材対象に含んでおり、下層民の生活環境で注目している要素もほぼ同じである。下層社会の住宅や、衣服、家族関係、習俗等は、貧困状態を視覚的に描き出すための素材として用いられている。貧困について叙述した作家・記者たちが注目した要素には、どのような意味があるのだろうか。

本論は、この疑問に答えるため、貧困をめぐる報道と当時の社会の動きを重ね、明治期の貧困の叙述を日本の歴史的・社会的な文脈の中で立体的に捉えて分析する。明治の貧困の問題は、松方財政後の市場経済の混乱期に浮上するが、政府の姿勢が初めて示されたのは、一八九一年の名護町取り払いにおいてである。本論では、この時期までを一区切りとし、取り扱う作品を、「東京府下貧民の真況」から、取り払

いが実施される直前の名護町を取材した『貧天地飢寒窟探検記』までとする。

2. 官による貧民調査

この節では、まず、維新後の政治体制下で貧民が出現した背景を概観し、そして明治新政府が、一八八三年、民情調査のために日本各地に送った巡察使による報告書を見てみたい。これは、政府が早くから下層社会の実態調査を行っていたことがわかる資料である。

維新後、封建制の崩壊にともない、かつての上層身分の者が貧民に転落するという事態が起きた。特に下級武士の中からは、幕末の混乱期に主人に見捨てられ、麴町、三田に設置された施設に收容される者が出ていた¹。また農村においては、全国的に凶作が相次ぎ、農地を捨てざるを得ない人々が続出した。さらに、西南戦争のインフレ対策として実施された松方財政²は、農産物価格の下落を引き起こし、農民の流出に一層拍車をかけた。

天災と政治の混乱によって不運に見舞われた人々は、都市へ流入することになり、低廉な土地に住み着いた。このような土地には、やがて工場が建設されるようになり³、貧しい流民の一部は工場労働者へと身を転じていった。また、日本が近代化へ向かう過程で、殖産興業に必要とされる新たなエネルギー源が求められ、江戸時代から藩主導で採掘されていた高島炭鉱（一八六八年開坑）や三池炭鉱（一八八七年開坑）などは、明治に入ると財閥に買い上げられ、大がかりな開発・経営がなされるようになった。炭坑における強大な財力を持つ資本家と労働者という構図は、この時に出来上がった。

明治の初期は、従来型の社会階層の解体と再構築が急激に進行し、新たな労働形態が生まれた時期であった。その過程で社会からはじき出された貧民に対し、前述したように、明治政府は一八六九年に救育所を設置した他、一八七四年にはじゅうきゅうきょく「じゅうきゅうきょく 恤救 規則を設けるなどして救貧対策をとっている。また、一八八三年から八四年にかけて、日本各地に調査団を送っているが⁴、この時期に調査が行われた理由の一つが松方デフレである。日本各地の状況を網羅的に把握すると同時に、経済危機が民衆に与えた影響を調べる目的でなされた調査であった。

『明治大正大阪市史』（第七巻）⁵は、一八八三年、内務省から各地の民情調査に派遣された巡察使たちの報告書から、大阪市に関する部分を抄録したものである。この中に、榎村巡察使による「大阪府管内巡察記」があるが、三七に及ぶ調査項目には「取引所の衰微」「建野知事の勸業策」「政治と新聞」「大阪師範学校」などがある。その中で、「貧民街」という項目がある。

大阪市中にて貧民の集居する処を高津新地とす。数ヶ処の路地の中に裏長屋ありて、一坪半或は一坪を仕切り之に住居す。檻褌の衣、乱蓬の髪又は裸体にして腰に少しの古布を纏ふもあり。臭気鼻をつき不潔云ふ可らず。去れども傘・提燈其他些細の手職を為す。勸業課の処分宜きを得ば、或は良民となるべきものあらん。日本橋以南長町も亦窮民の集る処にして、高津新地より一層甚しく且つ多し。道路に棄たる廃物を拾ひ帰るあり、魚鳥の臟腑を持帰り食ふあり。此処にて業をなす者を見ず。食するに非ざれば必ず昼寝す。是則ち窃盜・掏摸・賊徒の巢窟たり。其居る処一坪に竈・鍋・布団各一を添へて、一日の借料二銭六厘と云。宜哉、夜行の徒昼間身を隠す処たる事⁶。

ここでは、大阪の貧民街として高津新地と長町が挙げられている。住民が、狭い住居に裸体に近い姿で居る様子が描かれ、貧しさと羞恥心の欠如が結びつけられている。維新以後、西欧からの視線を意識して「裸」に対する取り締まりが厳しくなっており、一八七二年には「裸禁止令」が、同じ年に「混浴禁止令」が続けて出されている。「裸」に対する感覚は、これらの法律が設けられることによって改められていった。貧民街における「裸」の描写は、文明と隔たっていることを示している。

また、「臭気」を表現しているが、その前に住民の身なりについて述べているので、下層民の体そのものが不衛生にイメージされる。しかし、住民たちが、こまごまとした手職に励む姿には「良民」となる可能性をみている。

長町のほうは、高津新地よりさらに貧しく、貧民も多い。住民は食物を得るために働くこともせず、食物がなければ「必ず昼寝す」など、貧困の原因が住民の性情にあるかのような書き方である。さらにここは「窃盜・掏摸・賊徒の巢窟」であるとし、犯罪の要素も入ってくるなど、全く救いがないような書き方である。

実は、高津新地と長町には、古くからの歴史がある。高津新地は一七三四年に遊郭（私娼地）が開かれ⁷、一八七二年に娼妓解放令が出されて廃止となるまで歓楽街として栄えた地である。もう一方の長町は、名護町とも呼ばれ、高津新地よりさらに歴史が古い。一六一九年、旅籠の設置が許可されて以来「細民」や「乞食」が住み、次第に「悪漢無頼ノ徒ノ巢窟」⁸となっていったとされている。巡察使の報告には、江戸時代からの名護町のイメージも織り交ぜられていると思われる。

この報告書から間もなく、名護町は世間の大きな注目を集めることとなる。一八八五年から一八八六年にかけて大阪でコレラが大流行するのである。この時、新聞は名護町が病気を媒介しているように書き立てるが⁹、これを機に、土地改良の議論が起り、移転計画が進められていく。

明治政府は、西欧に追いつくため、法、経済、教育、産業など、あらゆる社会システムを近代的な制度に構築しようと全国の状況を把握することを急いでおり、巡察使の調査の内容はその目的に沿うものであった。しかし、次に紹介する新聞は、政府とは異なるレベルで貧民の実態調査をしている。貧民街の職業、住宅、食物、衛生、婚姻など、注目している点は、政府と重なっている部分もあるが、より詳細な内容となっている。また、一般と異なる風物・習俗に対して、著者の価値判断も示されていて興味深い。

3. それぞれの新聞記事

3.1 貧困報道第一号「東京府下貧民の真況」

貧困についてのまとまった記述は、一八八六年の『朝野新聞』¹⁰にはじめて登場する。「東京府下貧民の真況」と題された雑報記事が、この年の三月から四月にかけて八回にわたって掲載されたのである。これ以降、他紙でも貧困地域を取材した記事が発表されるようになり、社会の注目度が高かったことがうかがえる。

貧困について叙述したのは、各新聞社に籍を置いていた記者たちである。彼らの中には、作家として活動している者や、政治家へと転身していった者もいた。明治の記者・作家たちは、文壇や社会・政治活動を通じて接点があり、お互いの作品を意識し、影響を与え合っていたと思われる。この節では、まずは、最も早く発表された「東京府下貧民の真況」をとりあげ、これ以降の貧困の叙述の特徴と比較してみたい。

「東京府下貧民の真況」の著者は、現在まで特定されていない。ただ、記事が掲載された時期の主筆が自由党の末広重恭であり、社員として在籍していたのが、同じく自由党の高橋基一、そして立憲改進黨の犬飼毅、尾崎幸雄、吉田燾六、町田忠治といった面々であったことから、同紙の高い政治意識にふさわしい内容の記事が求められたと思われる。また、記事が発表された時期をみると、松方デフレの余波が依然として続いている頃であるため、政府の調査と同じく民衆の実態を掴む目的でなされたことが推測される。ただし政府の調査と異なるのは、下層民の暮らしを詳細に記しているところである。

記事は、東京の貧困地域を southwest に区分けして、それぞれ代表的な貧民街について報告している。西方では四ツ谷鮫ヶ橋町、麻布谷町、筆筒町が挙げられており、北方では浅草松葉町、下谷万年町、南方では芝田町、芝新網町を挙げている。これらのうち、四ツ谷鮫ヶ橋町、浅草松葉町、下谷万年町、芝新網町は江戸時代から続く貧困地区であり¹¹、これ以降の貧困を取材した作家たちも、この地に潜入して記

事を書いている。

記事の内容に戻ると、調査項目は、職業、収入、食べ物、住環境などで、著者は、これらの調査結果から住民の日々の暮らしぶりを描き出している。住民は狭い荒屋にひしめき合って暮らし、男は車引き、日雇い、屑ひろいなどをし、女は内職、物もらいをする。子供は七、八歳になれば奉公に出され、老人は家で襤褸をつづ綴るといった描写が続く。また「其布団の不潔なると臭気の甚しき目を覆い鼻を撮むも尚ほ嘔吐を催さんとす」¹²など、政府の巡察史同様、臭気についても記しており、衛生状態も悪い。「眼病」¹³、「麻疹」、「天然痘」¹⁴などの病名も出てくる。

この中で、下谷万年町と芝新網町については、他の貧民街より、貧しさの度合いが一層深刻であることが述べられている。下谷万年町は「もとは乞食社会の住家なりし」¹⁵ 場所であり、芝新網町の貧民は「昔より正業を修めず、所謂願人坊主と云ふものゝ巢窟にて、人の門前に立て銭を貰ふを商法と為し居りし輩」¹⁶であるという。これらの地には、かつて乞胸ごうむねと願人がんにんと呼ばれる大道芸を稼業とする人々が集まって住んでいた¹⁷。彼らは非人身分ではないものの、仕事の一部には物乞いもあり¹⁸、下層階級のものともみなされていた。また乞胸と願人の間に仕事内容の差はほとんどなく、その境界はあいまいであった。この地域では、明治に入ってから江戸時代からの特性が継続していたのである。

貧民街の描写は、これ以降発表された他の記事においても、ほぼ共通している。ただ、「東京府下貧民の真況」で興味深いのは、貧民の住居を「人間の住家とも思はれぬ」¹⁹とし、「垢に塗れ塵に汚れ男女の分だに定かならず、獣に均しき有様なれば、世に何の望みありて尚命を惜み居るや、寧ろ此世を捨つるこそ楽ならめと思ふほどなれど」と、貧民の暮らしを、一般の人々から遠く隔たった「獣に均しき有様」として侮蔑する一方で、「亦此社会に入ればそれゞ夫婦の契も有り父子の情もあり、天地を高厦と思ひ襤褸を繡衣に充て疎食を食ひ水を飲み肱を曲げて枕とす楽其中にありと古人を気取る者もあるべし」と、彼らに対して理解を示しているところである。

また、祭礼の際、貧民が貧しい生活の中から供え物の準備をするのを見て、「尚ほ人間の皮を被りたる甲斐あるものに似たり。此中には自ら肩書を付けざるも士族の果てもありて、此人は兎角手鈍とて日雇いの口も少なければ自然窮乏の者多し」²⁰と、貧民が人間らしい暮らしを送るよう、努力していること、また、かつての支配階級から転落した者が（下級職の武士が多かった）下層社会で生計を立てていくことの難しさに触れている。

ここから読み取れるのは、著者の下層民に対する一定の理解と同情である。おそらく、明治初期、政治と経済の混乱の中、あらゆる階層から不運な者がこぼれ落ち

て行ったことを認識した上で、下層社会を、一般民衆が暮らす空間の周辺に捉えていると思われる。この記事は、一般の社会とは異なる劣悪な生活環境を読者に示すと同時に、貧民の人間らしい一面も見せているのである。

3.2 コレラの流行と取払い令『大阪名護町貧民視察記』

「大阪名護町貧民視察記」は、一八八八年一月八日から二二日まで、一五回にわたって『時事新報』²¹に掲載された。呑天鈴木梅四郎の筆名で鈴木梅四郎²²が執筆した。取材した貧民街が東京ではなく、大阪の名護町であることについて、鈴木梅四郎は次のように述べている。

英京倫敦の貧民事情、佛國巴里の裏店社会は書籍に物せるものありて夙に世に聞えたり日本の都府に於ける貧民少からざる中にも東京市内芝の新網、四谷の鮫ヶ橋、下谷の山伏此三ヶ町の如きは随分名高き貧民巢窟なれども、共に其区域狭く人口少きが故に貧民の貧其度の如何は兎も角も大きさに於て未だ貧民社会としての上乘に非ざれば、尚ほ以て奇観とするに足らざるに似たり。然れども大阪に於ける名護町即ち今の南区日本橋筋の貧民は其歴史も古く場所も広く兼て又人口も多き上に、貧困の度も世に珍らしきものなれば、若し日本貧民社会の事実中には面白きもの痛ましきもの等あるものなりとせば、此名護町貧民について取調べたるもの、先づ最も面白く最も痛ましきに近きものならん²³。

ここで鈴木梅四郎は、新網、四谷の鮫ヶ橋、下谷の山伏を有名な貧民窟として挙げているが、大阪の名護町のほうが規模と歴史において貧困の度合いが上回るために記事にしたと述べている。確かに、東京の貧民街が府下に散在していたのに対し、名護町は一つの地域にまとまっていたため、戸数は多かった。しかし、どちらの地域も貧民街として江戸時代からの歴史を持っており、生活水準・形態も様々で、同一基準では比較できない。おそらく鈴木梅四郎が取材したのは、この地域が取り払いの議論の対象となっていたことと関係しているだろう。

大阪では、一八八五年から一八八六年にかけてコレラが大流行した。その際、名護町が「目下悪疫流行の際一人病毒媒介の弁をなす」（『大阪毎日新聞』一八八六年、八月八日）とみなされ、「取払い」、「移転」すべきとする議論が起こった。名護町の解体に向けて、この年すでに「長屋建築規則」、「宿屋取締規則」が成立していたが、これらは貧民を地域から排除するための法律だった。そして一八九一年には、住民の過半数が立ち退かされることになる²⁴。

コレラは明治に入ってから全国でたびたび流行しているが²⁵、明治政府はただ手をこまねいて見ていたわけではない。避病院の設置（一八七七年）、飲料水注意法（一八七八年）など、病気の蔓延を防ぐ対策を講じている。また、この間様々な機関が欧米の衛生法に関する文献を多数翻訳している²⁶。これを見れば、政府は、欧米における伝染病予防の措置を研究した上で、衛生法を導入していったことがわかる。「長屋建築規則」、「宿屋取締規則」は、こうした流の中で設けられた法律であった。

また、先の引用の冒頭で、「英京倫敦」と「佛國巴里」の「裏店社会」が書籍となっていることに触れているが、これは貧困についての外国文献が入手できる状態であったことを示している。また、他の箇所でも外国の状況に触れている部分がある。名護町の住民が、不潔な狭い家屋に大勢居住している様子を「印度土人の一種族シヤングス」²⁷が暮らす「六尺四方の矮屋」にたとえている。情報源は、「印度誌中の一記事」であるというから、様々な国の文献が日本に入ってきていたと推測される。

この他、鈴木梅四郎が調査した項目をいくつかひろってみたい。まずは名護町の成り立ちについて解説した「名護町に貧民の集りし事情」。公許の旅人宿が設けられて以来、宿場町として栄えていたが、江戸時代に出稼ぎ人が増加するにつれて「乞食非人」が集まり「悪漢兇兇」の巢窟と化していった推移を記している。

名護町住民の職業の一つとして記した「名護町貧民の盗業事情」では、維新後、古くから続いていた「此盗賊組合の組織は全く瓦解し」たが、大阪中の盗業ネットワークは健在であることが述べられている。一八八一年から一八八六年までの名護町貧民の検挙された盗犯件数が挙げられている。一八八三年から八六年は、それまでの二倍近い件数になっているが、盗犯の急激な増加は、松方財政によるデフレの時期と一致する。貧しい人々が生活に窮して盗みに手を染めた姿がみえてくる。

「名護町貧民の婚礼及出産」は、家族調査だが、その実は名護町住民の性道德についての報告となっている。この社会では、一般的な婚姻慣習とは異なり、「姦通」が「非常に行はるる」こと、配偶者が「懲役若しくは入獄等」で不在の場合、妻は他の男性と容易に内縁関係を結ぶこと、そして妻が不在で夫が他の女性と関係を結んだ場合もまた、寛容に受け止められることが述べられている。

「衛生」の項目では、衣食住すべてにおいて甚だしく不衛生であることを「臭気」という言葉で繰り返し描写している。この地がコレラ大流行の際の「製造元たる観ありたる」としているが、これが世間一般の見方であったらう。

ここまで、名護町があらゆる面において、甚だしく一般社会と異なっていることが記述されているが、最後に救いの可能性を見せているのが「宗教」の項目である。

日本の宗教家がこの地に入って教化事業をなすべきであるとし、その理由を、「何となれば名護町貧民は極貧にして、その道徳も卑劣ながら一社会八千余人を保ち、日本同胞三千九百余万の中に算すべき兄弟にして、必ずしも教化し得ざる狂暴猙獰の人種にもあらざればなり」²⁸としている。ここまで、名護町の貧民がいかに異質な存在であるかを強調してきたにもかかわらず、最終的には下層民を「日本同胞」の枠内にとどめようとしている。

3.3 桜田文吾の『貧天地飢寒窟探検記』

『貧天地飢寒窟探検記』は、桜田文吾が大我居士の筆名で発表したものである。掲載媒体は、陸羯南が社主を務める新聞『日本』であり、一八九〇年八月二九日から同年九月二一日まで、前半部「貧天地」が連載された。後半部の「饑寒窟」は、同年一〇月七日から同年十一月八日まで連載された。「貧天地」は東京の貧民街を調査したもので、「饑寒窟」は大阪の貧民街を取材した記事である。一八九三年には、前半部と後半部が一つにまとめられ、『貧天地飢寒窟探検記』として日本新聞社から出版されている。

桜田文吾は、他の著者のように調査項目ごとに記述するのではなく、自分の行動を順を追って記し、その過程で見聞きした情景を盛り込んでいるので、その描写は視覚的である。桜田文吾は、取材を敢行するまでの経緯や自分の半生にも触れており、自分の人物像を示しており、読者にとって心情を重ねることができる。さらに、下層社会で出会った人々とのやりとりを会話調で載せているために臨場感が増しており、読み物として、先の二つのものより深みを感じられる。

これを可能にしたのは、桜田文吾の取材スタイルである。桜田文吾は、身元を明かさずに貧民街に潜入し、貧民と同じように木賃宿に泊まり、彼らと食事をともにするという潜入取材を行った。そこで拾った生の声によって、貧民の日常の風景がリアリティをもって描き出されることになったのである。

東京編である「貧天地」は、万年町から始まり、浅草松葉町、新網、鮫ヶ橋等の貧民街を回っている。貧民の生活水準は、商店で売られている食品や日用品、職業などからうかがわれる。また桜田文吾は、彼らと直接関わることで、身の上話を聞き出しており、個々の貧民たちの背景がみえてくる。

取材項目は、他の叙述と共通している。「裸」については、「何れも四畳半の座敷より多きはなく、六人の男女各々裸体に快けに話し居る様など自から又一世界を現はせり」²⁹と、異性がいる狭い空間で肌を見せていることを記しており、慣習としてではなく、貧民の性道徳の欠如として示している。この他、新網に向かう途中で

コレラによる死者に出くわす場面もあり、大阪ほどではなくとも、東京の貧民街においてもコレラが発生していたことがわかる。

「貧天地」は、最後にいくつかの観点から総括されている。住民の貧困の原因が「兼併、社会に行はれ、貧富、距離を進め、米価騰貴、生活を困難にし、金融渋滞、工業を沮息せしめたる等」によって引き起こされていることを指摘しており、貧民の状態を客観的にみている。他には、住民の人口中女兒の割合が多いこと（都市下層社会では女兒に高い商品価値があることを示唆）、貧しい環境下でも篤志家によって学校教育が試みられていること、下層社会の中でも、さらに階層が分かれていることなどに触れており、貧民を様々な視点から捉えようと試みていたことがわかる。

大阪編である「饑寒窟」は、ちょうど名護町取り払いの直前に書かれたものである。「時に大阪の虎列刺は最も其猖獗を極め、中央衛生局の報告表は其十中の七分迄死亡の實を示したり」³⁰とあり、社内で反対意見があったにもかかわらず、取材を敢行したことが記されている。この頃は病気の流行はピークを過ぎていたが、コレラに関する記述は多く、散発的な発生が続いていたことがわかる。それはまた、危険な地域に潜入する桜田文吾の姿を読者に印象づける効果にもなったろう。

桜田文吾は、「鉛壳」や「屑屋」に身をやつし、名護町から今宮、木津、西濱、難波を回り、貧民の生活を観察して歩く。その中で、コレラだけではなく、「癩病」、「癩瘡」、「眼病」の多さを目にしている。また、「臭気」はここでも強調されている。今宮村の「一大塵芥場」については、「汚毒の蒸発気は得もいはれぬ悪臭を放ち烟りの如く立ち上る」と描写し、宿で食事をとろうとしても「路地ゝに漲りたる汚穢の汚穢の悪臭は紛然として鼻頭に留まり」、食欲がそがれる。

名護町の裏長屋を結ぶ路には、「共用の井戸一ヶ所、共用の総雪隠二三所、同じく共用の大塵芥所亦一ヶ所、咫尺の間に隣を比し面を対して並ひたり」とあり、悪臭の発生源がここであることがわかる。また、農家に「小便」を売るため、個々の家々が「個人的小便所」を軒下に設置しているため、「長屋の一带は更に一層の悪臭を添えたり」と、排泄物の管理状態が不良であることを記している。

コレラの感染経路はコレラ菌による経口感染によるものだという現代の知識をもってみれば、名護町住民の飲料水が、すぐ近くに建っている共同便所によって汚染されかねないこと、また、共同便所使用そのものの安全性、さらに、個人の家庭内での排泄物の管理など、危険な要素が目につく。しかし当時のコレラ発生の際の対処法は、患者が出た場合には避病院に隔離し、その地域を封鎖するというものでしかなかった。

この当時、コレラおよびその他の伝染病の感染経路や、正しい対処方法が知られ

ていなかったことは、桜田文吾の記述にも表れている。

小児の癩瘡、眼病、殊に多く、就中一般の流行病及び伝染病は此一窟に入りて其猖獗を極めぬはなし、医師の説に由れば小児の癩瘡多き所以は、微毒性の遺伝と孕婦の悪食主因に居り、眼病多きは、矮室の中塵埃の空気窒塞するに由るものなりと、而して此窟の流行病及び伝染病を流傳する迅速にして激烈なるは、前にも嘗ていひしか如く、一には悪食、二には食事の無定限、三には薄衣、四には穢衣、五には住居の不衛生、六には医療の虧缺なり、加之生活困難の刺衝は終に死ぬなら虎列刺の諺をなさしむるに至り、さしも猛烈慘酷なる虎列刺をも左ほど恐れざるの境涯に瀕せしめたり³¹

これをみると、病の原因を「微毒性の遺伝」であると、家系や血統的な見方をしている部分もあるが、他は食や空気中の塵埃、衣・食・住の状態などに原因を求めており、伝染病が環境に起因するものだと考えていたことが分かる。

先に述べたように、明治維新後、政府は先進諸国に学ぶため、多くの外国文献を翻訳し、それを手本にしながら日本の衛生法を整備していった。近代的な衛生観念が形成されていく過程で、不衛生は、病気と容易にからめられ、貧民街は病毒の源としてみなされていった。

大阪の貧民街について叙述した「饑寒窟」は、最後に総括的に貧民街の全体像を解説しており、職業や賃金、労働時間、盗犯等についても触れている。しかし全体の中では、衛生面についての記述が多くを占める。やはり、コレラ流行の地であり、取り壊し論議の対象として、社会の注目が集まっていたからだと思われる。この他、諸外国の社会事情について触れている部分が見られるが、桜田文吾もまた、貧困に関連した先進国の動向を把握し、知識を蓄えていたことがわかる。ただし、欧米を意識した記述については、別の機会に稿を改めて述べることにしたい。

貧民街の取材を終え、東京の新聞社に戻った桜田文吾は、同僚たちに「欣々笑を開きて」迎え入れられる。「予も何となく心うれしく、恰も大戦の中より出て、凱旋したるの思ひをなせり」³²と、気持ちを表している。ここで「凱旋」という言葉で語っているように、コレラ感染の危険性、もしかしたら命を落とすかもしれないリスクを犯して、戦地に赴くがごとく潜入取材したことに、誰も為しえなかったことを達成したという自負が表れている。

4. 封建制の解体と新秩序のはざままで

これまで、貧困についての叙述を日本の政治的・社会的動きと重ねてみてきた。いずれにも共通しているのは、貧民の衛生状態と病気を結びつけている点である。数回に及ぶコレラ大流行を経験する中で、貧民街の病気の発生率と死亡率の高さは社会の注目を集めることになった。また、西洋における伝染病に対する取り組みが研究され、コレラ予防策として病人の隔離と発生家の囲い込み等、具体的な手段が取られたことは、衛生に対する意識変革をもたらした。

貧民街が不衛生であり、病気の温床であるという記述から読めるのは、不衛生＝病気の蔓延という近代的な衛生観念である。ただし、貧民の貧困状態は、衛生だけではなく、風紀の乱れや、性道德、犯罪等もすべて含んでおり、下層社会の生活環境を表すものとしてひとまとめにされている。また、多くの叙述が、臭気について触れているが、発生源を特定しないまま環境臭として記している。貧困状態を記録した者たちは、臭気→不衛生な環境→伝染病の伝播へと連結させているのである。

そしてもう一つ、全ての貧困の叙述に共通する要素がある。それは、貧民街が古くから下層社会としての歴史を持つ地域であったということである。都市における貧民街は、身分と職業、居住地が不可分であった江戸時代には、すでに存在していた。明治に入り、身分制が廃止されてからも、土地に残った住民と、その職業と、それに付随した習俗が引き継がれたことが、それぞれの叙述から読み取れる。

前述したように、下谷万年町、芝新網町は江戸時代、乞胸、願人の居住区であった。名護町の場合は、旅籠が開かれて始まった集落であったが、大阪の発展とともに労働者を収容する目的で長屋、木賃宿が建設され、自然に貧困や犯罪という負の部分が生立っていった。これらの地域は、江戸時代から、下層民が住む地域として囲い込まれ、周囲とは異なる空間として知られていた。貧困を取材する記者たちが赴いたのは、明治になってから出現した空間ではなく、封建制のもとで特殊化されてきた歴史を背景に持つ地域だったのである。

貧困の叙述は、職業について詳細に報告しているが、それは収入と貧困状態を相関させるだけではなく、階級と地域住民の特性が職業に反映されていることを示すためだと思われる。ほとんどの貧困の叙述は、一般的には職業と認められない「乞食」を貧民の職業の一つとして記している。

「乞食」の形態として、「東京府下貧民の真況」では、「或る時は浅草寺の墓地に行きて葬礼の来るを待ち、付き纏ひて強飯を請ひ銭を求むるものあり」³³と、縄張り確保している様子を記している。『大阪名護町貧民窟視察記』と『貧天地飢寒窟探検記』では、警察の帳簿（『貧天地飢寒窟探検記』では「当局」としている）

をもとに「乞食」の人数を載せているが³⁴、これは公的機関が、「乞食」を貧民の生業の一つとして見なしていたことを示している。明治に入り、日本各地では乞食行為を禁止し、乞食に施しをする行為を罰する規定が出来ていたが、江戸時代からの貧民街は例外視されていたことがわかる。

「乞食」業は、江戸時代には、非人、願人、乞胸らに認められた仕事であった。このうち願人は僧侶の身分であり、寺社奉行の管轄下にあった。乞胸は町人身分とされていたが、仕事の内容は非人と重なっており、非人頭の車善七に鑑札を貰い受けて仕事をしていた。彼らは非人と同様、社会の最下層の者として位置づけられていた。そして、その多くは、明治になってからもそのまま地域に残り、彼らの仕事である「乞食」業は、地域に固有のものとして見なされるようになったのである。

明治における貧困の叙述の流行は、すでに知られている事実が、新しい現象として報じられたものだったとすることができる。なぜこのようなことが起きたのか。その最大の理由は、身分制の廃止、もっと具体的に言えば非人の組織解体にある。

江戸時代、非人の集落は、都市に点在しており、町の清掃や行き倒れの死体処理、犯罪者の捕縛、病人の世話、また飢饉などで都市に逃げてきた農民、浮浪者などを狩り込み、非人管理下に置くなど、都市の重要な役割を公務として果たしていた。それが明治初期の動乱で、まず都市に流れ込む貧民たちを管理・収容しきれなくなる。そして、身分制の解体とともに、非人のもとで組織されていた身分、職業、居住地の結びつきが崩れた。管理不能になった下層社会は、誰にでも開かれた空間となり、一般の人々に意識化されたのである。

貧民は、かつては制限されていた居住地と職業の限界を超え、仕事を選ぶようになり、収入に応じた居住地に住むようになった。特定の集団にしか認められなかった空間は、ただ一点、貧困という共通点を持つ人々によって占められていく。境界が失われ、内と外との行き来は自由になったが、それは、反面、旧体制によって守られていたものが機能しなくなったことも意味する。記者たちが取材したのは、古い体制と新秩序のはざまに起きたシステムの崩壊だったのである。

おわりに

本論は、明治の貧困の叙述で取り上げられた要素に注目し、その意味を政治的・社会的文脈から解明しようとした。そうして確認できたのは、貧困状態を近代的な衛生観念に基づいて評価しようとする視線である。維新以降、急激に吸収されていた西欧的衛生観が基準となり、貧困状態は、その対極に位置するものとして描かれている。また、貧困の生活環境そのものが、衛生という範疇の中で捉えられてい

たことを確認した。

下層社会が叙述されるようになったのは、それまで内部で完結していた世界が外に向かって開かれたことにある。江戸時代、貧民は、身分制の中で最下層のグループに吸収され、そこで扶助された。それが機能しなくなった時、下層社会は一般市民の目の前にさらけだされた。新聞が、新たな切り口で描いてみせたのは、江戸時代から続くシステムが不全となった空間であったのだ。

注

- 1 塩見鮮一郎『貧民の帝都』、文芸春秋、二〇一〇、三〇～三一頁。
- 2 一八八一年に大蔵卿松方正義が行った財政政策。激しいデフレーションが引き起こされた。
- 3 塩見『貧民の帝都』によると、維新後、新網には瓦斯会社、芝浦製作所が建てられた(一二八頁)。
- 4 前田正名『興業意見』一八八四、横村正直「大阪府管内巡察記」一八八三など。
- 5 大阪市『明治大正大阪市史』(第七巻)、日本評論社、一九三三～三五頁。
- 6 前掲書、四頁。
- 7 『日本遊里史』(上村行彰、藤森書店、一九八二)では、公許の遊郭から私娼街まで、日本の遊里を確認することができる。
- 8 加藤政洋『大阪のスラムと盛り場：近代都市と場所の系譜学』、創元社、二〇〇二、四九～五一頁。
- 9 加藤政洋「大阪最初のスラムクリアランスとその帰結－「木賃宿の長屋」地区の形成をめぐって」(『立命館大学人文科学研究所紀要』、立命館大学人文科学研究所、二〇〇四)では、コレラと貧民街を結びつけた『朝日』新聞の記事を複数紹介している。
- 10 一八七四年に創刊された民権派の政論新聞。
- 11 西田長寿編『明治前期の都市下層社会』、光生館、一九八一、一〇頁。
- 12 前掲書、五八頁。
- 13 前掲書、五七頁。
- 14 前掲書、六一頁。
- 15 前掲書、五九頁。
- 16 前掲書、六一頁。
- 17 浦本蒼至史『江戸・東京の被差別部落の歴史 弾左衛門と被差別民衆』、明石書店、二〇〇三、一四五頁。
- 18 塩見鮮一郎『乞胸 江戸の辻芸人』、河出書房新社、二〇〇六、八二頁。

- 19 西田、五六頁。
- 20 前掲書、五九～六二頁。
- 21 一八八二年、福沢諭吉により創刊された新聞。
- 22 鈴木梅四郎は一八六二年、長野県生まれ。慶應義塾を卒業後、一八八四年に時事新報記者となる。一八八八年には横浜貿易新聞社社長となり、その後三井銀行に入る。実業家・政治家として活躍した（西田、三〇～三二頁）。
- 23 西田、一二五～一二六頁。
- 24 名護町をめぐる行政の姿勢、取り払い実施については加藤政洋『大阪のスラムと盛り場』七六～八五頁に詳しい。
- 25 一八七七年、一八七九年、一八八二年と全国的なコレラ流行が続いた。
- 26 一八八九年の「諸官庁訳書目録」には、米國、英國、独逸、仏蘭西などの衛生関係の文献で、翻訳されたもののリストが掲載されている（「明治前期の廃物規制と「汚物掃除法」の成立」、五一頁）。
- 27 西田、一三一頁。
- 28 前掲書、一四六頁。
- 29 前掲書、七〇頁。
- 30 前掲書、八六頁。
- 31 前掲書、一一五頁。
- 32 前掲書、一〇四頁。
- 33 前掲書、五八頁。
- 34 前掲書、一三五頁。